Lyric Colors vol.10

リリック カラーズ

2023
9.25発行
TAKE FREE

あなたの毎日に芸術文化のいろどりを。

Photo: K. Miura

特集

長岡ゆかりの出演者で贈る **市民創作オペラ**

文学座公演 **逃げろ！芥川**

スペシャルインタビュー

平原綾香

注目公演

佐渡 裕 指揮　シエナ・ウインド・オーケストラ演奏会《ブラスの祭典2023》

スタニスラフ・ブーニン　ピアノ・リサイタル

公益財団法人 長岡市芸術文化振興財団　広報誌

11/5(日)
長岡市立劇場
開場　13:30
開演　14:00

佐渡 裕 指揮　シエナ・ウインド・オーケストラ演奏会《ブラスの祭典2023》

全席指定　S席 8,500円　A席 7,000円 ／ 学生S席 6,500円　A席 5,000円

チケット好評発売中

※学生席は大学生以下。入場時学生証提示。規定枚数に達し次第販売終了。　※未就学児入場不可

世界的指揮者 佐渡裕と吹奏楽の最高峰 シエナ・ウインド・オーケストラが今秋長岡に再登場！

ベルリン・フィルをはじめ、世界の一流オーケストラを率いてきた佐渡裕さんと吹奏楽大国の頂点に君臨する人気楽団、シエナ・ウインド・オーケストラの最強タッグが2年ぶりに長岡に登場します。演奏曲目は、イタリアの作曲家、レスピーギの代表作として知られる交響詩《ローマの祭り》、《ローマの噴水》、《ローマの松》。元々はオーケストラ作品ですが、管楽器が大活躍するため、吹奏楽編曲版もオリジナルと遜色ない迫力のある演奏をお楽しみいただけます。また、市立劇場開館50周年を記念して佐渡さんによるトークも特別に開催します。“佐渡×シエナ”のエネルギッシュなステージをたっぷりとお楽しみください！

©Hikaru.☆

Profile　**佐渡 裕**

京都市立芸術大学卒業。故レナード・バーンスタイン、小澤征爾らに師事。1989年ブザンソン指揮者コンクール優勝。1995年第1回レナード・バーンスタイン・エルサレム国際指揮者コンクール優勝。現在、110年以上の歴史を持ちオーストリアを代表するトーンキュンストラー管弦楽団の音楽監督に就任し、欧州の拠点をウィーンに置いて活動している。国内では兵庫県立芸術文化センター芸術監督、シエナ・ウインド・オーケストラ首席指揮者。2023年4月より新日本フィルハーモニー交響楽団第5代音楽監督に就任。

©Takashi Iijima

［シエナ・ウインド・オーケストラ］

1990年に結成されたプロフェッショナルのウインド・オーケストラ。吹奏楽オリジナル曲やマーチはもちろん、クラシック、ジャズ、ポップスなど幅広いレパートリーをもち、定期演奏会のほか青少年育成事業への出演等、年間100回を超える事業を展開。2002年より佐渡裕を首席指揮者に擁し、ユーモアあふれるパフォーマンスで吹奏楽の新境地を切り開いてきた。近年ではエイベックスから「佐渡×シエナ バーンズ：交響曲第3番（長岡市立劇場にて収録）」「ブラスの祭典BEST」をリリース。

11/26(日)
長岡市立劇場
開場　14:30
開演　15:00

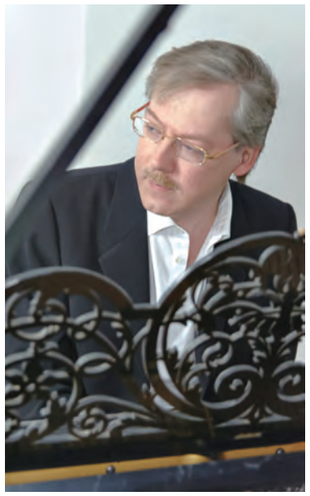
スタニスラフ・ブーニン　ピアノ・リサイタル

全席指定　S席 9,500円　A席 7,000円　※未就学児入場不可

残りわずか

伝説のピアニスト、ブーニンが 10年振りのリサイタルツアーを開催！

1985年、第11回ショパン国際コンクールにおいて、若干19歳で優勝したスタニスラフ・ブーニン。圧倒的な演奏で世界に衝撃を与え、日本でも“ブーニン現象”と呼ばれるほどの一大旋風を巻き起こしました。この秋、活動休止期間を経て、待望の全国リサイタルツアーが決定し、長岡公演が実現しました。この公演では、ブーニンの大のお気に入りでもあり、世界最高峰のショパン国際ピアノコンクールで大きな注目を集め、近年躍進を遂げているイタリアメーカーのピアノ『ファツィオリ』を長岡市立劇場に持ち込み、芳醇で明るく艶やかな音色で渾身のプログラムをお届けします。伝説のピアニストによる魂の演奏をぜひ会場でご堪能ください。



Profile　**スタニスラフ・ブーニン**

1966年モスクワ生まれ。1983年ロン＝ティボー国際コンクールに17歳で優勝。1985年第11回ショパン国際ピアノ・コンクール優勝。EMIと専属契約を結び10枚以上のCDを録音。2012年4月、NHK「TOMORROWbeyond3.11」に出演し、被災地・仙台三桜高校音楽部と共演。2013年より闘病のため演奏活動を一旦停止。
2022年6月八ヶ岳高原音楽堂でのリサイタルで復帰。同年秋にNHKBSプレミアムで放送された「それでも私はピアノを弾く～天才ピアニスト・ブーニン9年の空白を越えて」は大きな反響を呼んだ。
2023年11月より待望のリサイタルツアーを東京・新潟・長野・埼玉・大阪・山口の全国6カ所で開催予定。

［表紙］
8月に開催された“アフィニス夏の音楽祭2023”で楽器体験を楽しむ子ども達の様子。音楽あふれるアツい夏、国内外から集まったたくさんの演奏家やお客様の笑顔に包まれながら、大盛況のうちに5年間の幕を閉じました。

Lyric Colors vol.10
〈2023年9月25日発行〉

発行（公財）長岡市芸術文化振興財団
〒940-2108 新潟県長岡市千秋3丁目1356番地6
TEL.0258-29-7715　https://www.nagaoka-caf.or.jp/

長岡リリックホール Nagaoka Lyric Hall

長岡ゆかりの出演者で贈る

市民創作オペラ

長岡市立劇場開館50周年を記念し、長岡市民による“オペラ「長岡物語」”が制作されました。

この作品は以前に、台本や作詞、作曲を地元の方が手掛け、出演者も長岡に縁のあるアーティストで上演された、オペラ「長岡物語～戊辰の苦悩をのりこえて～（作詞：畠山徳雄／2018年）」と「月見草の嫁（原案・脚本 石坂貢治／2018年）」を融合し、ヴァージョンアップさせた新作です。更に、演出には日本を代表する老舗劇団「文学座」の高橋ひろしさんを招き、演劇的な要素も加わり、市立劇場の大舞台で堂々上演されます。

今回は、台本・チェロの演奏を担当する片野大輔さんと、指揮・作曲を務める星野勝彦さんに作品についてお話をお聞きしました。

片野 大輔／台本・チェロ　星野 勝彦／指揮・作曲

――この作品を制作するきっかけをお聞かせください。

片野大輔さん（以下、片野）／長岡民話を題材とした「月見草の嫁」、開府400年を記念し制作された「長岡物語～戊辰の苦悩をのりこえて～」は、いずれも私と星野さんが関わらせていただきました。ありがたいことに、「せっかく作ったんだから、1回限りの公演で終わらすのはもったいない！」と、多くの再演を待ち望む声が我々のもとに寄せられていました。そこに、市立劇場開館50周年記念に何かやってみませんか？と声が掛かり、この2作品の再演をしたいと思いました。そこで、前回はリリックホールでの公演…、市立劇場の舞台はずっと大きくなる…、ならばいっそ合体させてボリュームアップさせたらより面白くなりそう！と、思ったわけです。台本を書き直すにあたり、河井継之助記念館へ足を運び、館長さんから色々なことを教えていただきました。200年もの間、語り継がれている継之助の残した足跡を知れば知るほど、私自身も良い作品を残し、長岡の芸術文化がこの先ずっと発展していくよう、今自分ができることを精一杯やっていこう、と改めて感じながら台本を書きました。

――前作との違いはどういった点でしょうか？

星野勝彦さん（以下、星野）／片野さんから作品構想を聞いたとき、長岡の史実に「月見草の嫁」のファンタジー的な要素を絡めるところがとても面白いと思いました。「長岡物語」と「月見草の嫁」の共通点である“成就しない恋”に着目し、よりドラマチックな物語になるよう心掛けました。絶妙に繋がれた二つの物語を日本的で独特な音楽とともにストーリーが繰り広げられています。

曲の聴きどころは、スガが継之助との婚礼の際に“幸せの絶頂を歌うアリア”と、継之助の遺髪を手にして“嘆き悲しむアリア”の喜びと悲しみを表現したメロディーの対比にご注目いただきたいです。

片野／今回は前作より舞台規模が大きくなるので、長岡市芸術文化振興財団が地域拠点契約を結ぶ“文学座”にご協力いただきました。長岡で演劇活動をしている役者の方たちが出演し、演劇的要素が加わったことで、一場面一場面がブラッシュアップされ、これまでにない見応えがあるものとなっています。

かつて、財団の芸術顧問をされていた、故三善晃先生が、「地方のホールは東京でつくられたものを興行するだけの場所ではない。東京で活躍しているプロの手を少しだけ借りて、長岡独自の芸術文化を育てよう。」とおっしゃっていました。今回は、そのお言葉を少しだけ実行できたんじゃないかな、と思っています。

――この作品の注目ポイントを教えてください。

片野／何と言っても、曲づくりから出演者まで“オール長岡”で創り上げているという点です。また、前作は音楽関係者だけでしたが、今回は、演劇、茶道など幅広い分野で活躍する方たちと一丸となってひとつの作品に挑みます。開館50周年に相応しく、長岡の文化を担う人たちによる集大成とも言えるのではないでしょうか。

星野／このオペラを通して、歴史や民話などの物語や、様々な芸術文化活動に取り組んでいるマンパワーが長岡には豊富にあるということを多くの方に知っていただきたいです。そして、私たちのこのような活動が長岡の財産となればと願っています。たくさんの方々のご来場をお待ちしております。

作品への意気込み

演出

高橋 ひろし（文学座）

長岡市立劇場開館50周年を記念した、オペラ「長岡物語」の演出を担当させていただきますこと大変光栄に感じております。初めて長岡に訪れた日は記録的な大雪でした…が、皆さんの気持ちはとても温かったことが印象的です。これまで、演劇ワークショップや朗読会、文学座公演で長岡は何度か訪れていますが、今回の舞台づくりでより深く関われることになりました。長岡の皆さんがこの土地を誇りに思い、そして大切にしていることをとても強く感じています。この作品が時代を越えて、長岡の人々の長岡への想いがたくさんあふれる舞台になればいいなと思っています。11月に皆様にお会いできることを楽しみにしております！

Profile

文学座所属俳優。『一銭陶貨～七億分の一の奇跡～』（文学座公演）、『女の一生』（文学座公演）、『オセロー』（彩の国さいたま芸術劇場）、ミュージカル『スクルージ ～クリスマス・キャロル～』（日生劇場）など外部出演を含めて幅広く活動中。声優としても『るろうに剣心』（佐渡島方治）や『おじゃる丸』（冷徹斎星月）の他にテレビ、CM等にも多数出演。また、一人語りやワークショップの講師としても活動中。

キャスト

鈴木 至門（松蔵）

農家となり、長岡に居を構えて10年が過ぎました。すぐに歌手であることがバレて（笑）たくさんの歌のお仕事をいただくようになりました。その集大成として、この物語を紡ぎ、長岡の皆さんにオペラの魅力を伝えることができたら幸いです。

坪内 麗音（河井スガ）

生粋の長岡生まれ・長岡育ちの私が、「長岡物語」に出演できることをうれしく思います。死に急いだ河井継之助の陰で、河井家に最後まで尽くしたスガを身近に感じていただけるよう、想いを込めて精一杯歌います。

佐藤 晶子（つね姫）

市立劇場の舞台に初めて立ったのは、小3の日舞の会でした。大きな声で台詞が言えずお師匠さんに相当絞られた私がオペラで出演するようになるなんて（笑）。舞台の上は何歳になっても“お姫様”を演じられるステキなところです。皆さま、どうぞオール長岡の公演を存分にお楽しみください。

五十嵐 郊味（月見草の嫁）

月見草の嫁の役をいただいた時、オペラ「てかがみ」（長岡リリックホール開館20周年記念事業）のカヨ役の時のように、号泣しながら練習することになりそうだな…と思いました（笑）。世知辛いこの世の中を生きる私たちに、月見草の嫁の必死の愛が、皆様の心に一石を投じることができたら幸せです。そして、この作品が長岡から世界に発信出来たらうれしいです！

―歌い紡ぐ長岡の歴史― オペラ「長岡物語」

11/19（日） 開場 13:30 開演 14:00

長岡市立劇場・大ホール

全席指定 1,500円　チケット好評発売中

［あらすじ］

長岡藩の重臣、河井継之助の半生を、第11代藩主、牧野忠恭の視点で展開する物語。忠恭公の次女、自由活発な「つね姫」と、純朴な庭師「松蔵」の若き二人のロマンスから、長岡の民話“月見草の嫁”、戊辰の役を経て小林虎三郎の米百俵の故事に至るまでを華々しく描いたオリジナル作品。身分制度の厳しい時代に身分を越えた恋愛はご法度。若き二人の運命は…。

※未就学児入場不可　※車椅子席をご希望の方は、長岡リリックホールへお問合せください。

台本：片野大輔　作詞：畠山徳雄、石坂貢治
指揮・作曲：星野勝彦　演出：高橋ひろし（文学座）
キャスト：鈴木至門、五十嵐郊味、佐藤晶子、坪内麗音、相木隆行、山入端花音、今井和江、藤井芳、畠山徳雄、佐藤正徒、小池匡、牧野忠慈、長岡少年少女合唱団

室内楽：長岡物語アンサンブル
コンサートマスター：大関博明　第1ヴァイオリン：佐々木將公
第2ヴァイオリン：阿部智子、佐々木友子　ヴィオラ：加野晶子、阿部楓佳
チェロ：片野大輔、前田美華　箏：池田聡子　ピアノ：金子陽子

特集

文学座公演 逃げろ！芥川

今年の文学座公演は、100年前に世界を席巻したスペイン風邪の最中、親友の芥川龍之介と菊池寛が長崎旅行した史実をもとに、列車という閉ざされた中で巻き起こる人間ドラマ「逃げろ！芥川」を上演します。脚本は劇団を主宰し、高校演劇部顧問でもある異色の劇作家 畑澤聖悟さんの書き下ろし、演出は長岡との付き合いが深く、日本の演劇界を牽引する西川信廣さんが務めます。

今回は、文学座と畑澤さんが初タッグを組むこの公演に向けた想いを、西川さんにお聞きしました。

畑澤作品の魅力と本作の見どころ

畑澤さんは劇作家、脚本家、演出家、放送作家、俳優、そして青森県の高校で教鞭をとる現役の教員です。しかも、２００５年に渡辺源四郎商店という劇団を立ち上げ、その主宰者でもあります。高校の教員としての体験から書いた作品も多く、中でもいじめ問題を起こした子供たちの親たちを描いた『親の顔が見たい』は代表作です。この作品もそうですが、閉ざされた空間で起こる人間ドラマを対話だけで描くのが畑澤作品の魅力です。

ある劇団で『親の顔が見たい』を私が演出したときから、文学座に書き下ろして欲しいと思っていました。台詞の上手さとシチュエーションの設定が上手い。しかし、役者がその台詞をきちんと喋れなければ台無しです。文学座の演技陣は台詞術に長けていると思います。畑澤さんの描く世界と台詞が我が文学座と出会ってどんな化学反応を起こすかが狙いです。

文学座に書き下ろしをお願いした時は、題材については白紙でした。新型コロナウィルスが蔓延している最中、何度か作品についての話をしている時に、畑澤さんの方から「１００年前のスペイン風邪の時に芥川龍之介と菊池寛が長崎旅行をした」と言う事実があるが、それを土台に作品を書きたいとの提案がありました。列車の中が主な舞台と聞いた時に、「閉塞的空間での対話劇」で面白そうだと大賛成しました。

テーマやメッセージはありますが、事前にそれを言うと舞台を観る前に先入観を与えてしまいかねないので、あえて語りません。むしろ、観た方たちが、この舞台から何を受け取り、どう考えるかを楽しみにしたいと思っています。

地域の劇場と文学座

文学座は現在、長岡市芸術文化振興財団を含めて、3館の地域劇場と地域拠点契約を結んでいます。それぞれの劇場によってプログラムは違いますが、演劇的手法を取り入れて、演劇人、子供、親子、高齢者などを対象とした様々な試みをしています。良き舞台を見ていただくのはもちろんですが、劇場を通して「人と人とのつながり」を作っていくのが地域拠点の意義だと考えています。昨年、政府は「人々のつながりに関する基礎調査」を行いました。それによると4.5％の人が「常に・しばしば」孤独を感じていると答えています。劇場と劇団がタッグを組んで、「孤立と孤独」を少しでもなくしていくことは、劇場と劇団に対する、時代の要請と考えています。

長岡のみなさんへ

２０２１年の「ウィット」以来、私の演出した作品が長岡を訪れます。とてもうれしいです。長岡のみなさんとは20年以上のお付き合いです。1カ月以上も滞在して芝居やオペラを作ったりもしました。ですから、私にとっては単なる地方都市ではありません。もう一つの「故郷」でしょうか。長岡のみなさんの反応はとても素直だと思います。「ウィット」の時の反応も東京の時よりもストレートに反応があったと思います。今回の「逃げろ！芥川」でどんな反応が生まれるか…。ちょっとドキドキですが楽しみです。よろしくお願いします。

Profile **西川 信廣**

文学座演出部所属。1986年、文化庁派遣芸術家在外研修員としてイギリスに滞在。1984年文学座アトリエの会『クリスタル・クリアー』で文学座初演出。1992年文学座アトリエの会『マイ チルドレン！マイ アフリカ！』にて紀伊國屋演劇賞個人賞、芸術選奨・文部大臣新人賞。1994年文学座公演『背信の日々』で読売演劇大賞優秀演出家賞。2006年「おーい幾多郎」、2016年オペラ「てかがみ」では演出を手掛ける。新国立劇場演劇研究所副所長。日本劇団協議会会長。日本演出者協会理事。新国立劇場理事。

― 公演によせて ―

脚本の畑澤さんと、主人公 芥川龍之介の親友 菊池寛を演じる瀬戸口さんからメッセージをいただきました。

初めて「蜘蛛の糸」を読んだのは、たしか小学校4年生のとき。道徳の教科書に載っていました。興味を持ったのは地獄が舞台だったからです。当時はオカルトブームで、その手の読み物が流行していました。授業で先生は「くもの糸はなぜ切れたのか？」と黒板に大書されました。何人かの手が挙がり、「カンダタが自分だけ助かろうとしたから」とか、そんな意見が主流だったと思います。「自分の後から糸を登って来る亡者たちに、おい、気をつけろ。順番に登ってこい、とか、優しい言葉を掛けてさ。みんなで助け合って登れば良かったんじゃないかなあ」。先生はクラス全員にこう語りかけられ、授業は終わりました。しかし、大きな疑問が残りました。糸の強度が判断できない以上、亡者どもに向かって「下りろ。下りろ」と喚くのは当然です。それを「浅間しく思し召され」るとは、お釈迦様とはなんと残酷な方なのでしょう。まさか最初から糸を切るつもりで弄んだのか？それともなにか他の深謀遠慮があったのでしょうか？

以来、折に触れてこのことを思い出します。文学座さんから光栄にも書き下ろしのお話しをいただいたとき、芥川龍之介を描きたい、と真っ先に思いました。50年近く考え続けた問いに本腰を入れて取り組みたいと考えたのです。執筆中はコロナ下であり、北朝鮮のミサイルがあり、ウクライナ戦争がありました。この閉塞感からなんとか逃れたいという思いが物語として形を成したのだと思います。一生懸命書きました。ぜひ、お楽しみください。

Profile **畑澤 聖悟**

日本の劇作家、演出家、放送作家であり現役の公立高校教諭、演劇部顧問でもある。劇団・渡辺源四郎商店店主（主宰）。2005年『俺の屍を越えていけ』で日本劇作家大会短編戯曲コンクール最優秀賞受賞。ラジオドラマの脚本で文化庁芸術祭大賞、ギャラクシー大賞、日本民間放送連盟賞など受賞。指導した高校は、全国大会出場合計7回、うち最優秀賞3回、優秀賞3回を受賞の実績を残している。

長岡のみなさん、ご無沙汰しています。今回演劇ワークショップ、それに続く文学座公演「逃げろ！芥川」出演で久しぶりにリリックホールに参上することになりました。うれしいなあ！

以前はしょっちゅう長岡には伺っていてですね、「おーい幾多郎」（作・深井麗美 演出・望月純吉）、「夜明けのフェニックス」（作・池田むかう 演出・西川信廣）と市民参加劇にも二本出演しましたが、これ二本とも、長岡でひと月暮らしながら市民のみなさんと一緒に作った舞台でした。長岡のみなさんは人懐っこくて真面目な人が多くて、演劇の話を始めるとどこまでも食らいついてくるからなかなか話が終わりゃしない。そのうちこっちもお腹が空いてくるから「ビール飲みながら話そうか」って、稽古が終わった流れでよく一緒に飲みにも行きました。そのほか朗読会や演出ワークショップ、演技ワークショップで長岡の劇団の方たちと交流したり、それから地元の小・中学校へも演劇の授業で行ったなあ。そうそう、表町小学校四年生のみなさんとは一緒にお芝居を作ってリリックホールで上演しました！（みんな今じゃあもう立派な大人になってるんでしょうね）…等々、とにかく長岡ではいろんな出会い、いろんな思い出がこれでもかってくらいあるのですよ。

さて、そんな思い出多き長岡で、わたしが今回演じるのは菊池寛。「父帰る」の劇作家で「文藝春秋」を創刊した型破りな文士です。「生活第一、芸術第二」と言い放ち、小説を書くのは生活のためときっぱり公言しちゃう人だから、さぞかし当時の文壇には敵も多かったことでしょう。さあ、これからどう取り組むか…今は思案の真っ只中です。長岡のみなさん、劇場でお会いしましょう！

Profile **瀬戸口 郁**

1989年文学座附属演劇研究所に入所。また、劇作家としても数多くの作品を手掛け「てけれっつのぱ」（劇団 文化座）は平成20年度文化庁芸術祭大賞を受賞。長岡では市民参加公演で、2006年「おーい幾多郎」、2009年「夜明けのフェニックス」に出演。現在、慶應義塾大学文学部特別講師、都立総合芸術高等学校特別専門講師、東京藝術大学非常勤講師も務めている。

リポート

西川さんと瀬戸口さんを講師に招き、9月9日（土）にリリックホールで演劇体験ワークショップを開催しました。10代から70代までの約30名が参加しました。

参加者の声

- 自分自身を解放することができました。人と関わることは楽しいことだと改めて感じました。
- 想った以上に楽しく時間が過ぎました。プロの俳優さんの演技を間近で観ることができ、公演を早く観たいと思いました。
- 演劇要素を入れたゲームでの西川さんのお話はとても勉強になり、日々の生活や職場のコミュニケーションに役立てたいと感じました。

文学座公演 逃げろ！芥川

11/12（日） 開場 13:30 開演 14:00

長岡リリックホール シアター

全席指定 3,000円 ※未就学児入場不可

U-25 1,000円 ※25歳以下の皆様に舞台芸術に親しんでいただくための割引料金です。

作：畑澤聖悟　演出：西川信廣

出演：石川武　瀬戸口郁　若松泰弘　郡山冬果　鹿野真央　高柳絢子　日景温子　牧紅葉

アフタートーク開催
終演後、西川信廣とキャストが本作について熱く語ります。

［あらすじ］

大正8年5月4日。芥川龍之介と親友の菊池寛は列車で長崎旅行に出かける。東京は世知辛く、しがらみばかり。世界的に大流行した「スペイン風邪」の第1波は終息したかに見えたが、東京の感染状況はまだまだ予断を許さない。

「よし、長崎に逃げよう。ついでに保養や取材も兼ねよう。」

列車は西へと進む。普通の特急のはずであったが、芥川の作品の登場人物や彼を取り巻く女たち（初恋の女性、妻、愛人）が乗り込んでくる。芥川を責め立て、時空を越えた騒動が車内で巻き起こる。果たして芥川は逃げ切れるのだろうか――。

病と人類の闘い、そこで揺れ動く死生観、さらには彼らを待ち受ける厳しい現実を通して、不確実な未来に立ち向かう我々現代人の姿を映し出します。私たちが今向き合うべき問題に正面から挑む畑澤聖悟が初めて文学座に書き下ろします。長崎行きの“夢幻列車旅”、皆様のご乗車お待ちしております。

平原綾香 Special interview

スペシャルインタビュー

デビュー20周年を記念した“平原綾香20th Anniversary Concert Tour 2023 〜Walking with A-ya〜”を、市立劇場開館50周年の節目の年に開催することが決定しました！ 平原さんといえば、“復興祈願花火フェニックス”を頭に思い浮かべる方が多いのではないでしょうか。ダイナミックな花火のバックに流れる“Jupiter”は平原さんのデビュー曲でもあり、長岡市民にとって、大変身近で思い入れの深い存在となっています。

今回は平原さんご自身の20年間の活動や長岡との繋がりについて想いを語っていただきました。

20年分の想いを抱きしめいまの自分を表現したコンサートを——

長岡市立劇場開館50周年おめでとうございます。私のアニバーサリーコンサートを長岡で開催できることが本当にうれしくて、今からとても楽しみにしています。

お陰様でデビューから20年という節目を迎えることができました。この〝20年〟のことを表して、ツアータイトルを〝Walking with A-ya〟と名付けました。デビュー10年目も、11年目も、毎年毎年がアニバーサリーに思えるくらい濃い1年を過ごしてきたので、20周年を迎えた今年も、来年の21周年目もきっと同じ気持ちで音楽と向き合っている自分が見えます。

現在、アニバーサリーの記念アルバムを制作しています。これまでの作品を集めたベストアルバムではなく、新曲のアルバムをお届けします。アニバーサリーにこそ、新しいことにチャレンジするほうが、私らしいと思っています。それはコンサートツアーでも同じで、20年分の想いを抱きしめたまま、いまの自分を表現するコンサートが出来たらいいですね。新しく私の音楽を聴きはじめてくださった方にも楽しんでもらいたいですし、平原綾香を何も知らない方にこそ聴きに来ていただきたいです。もちろんこれまで応援してくださった方は、特別な想いで楽しめるコンサートになることは間違いないです！

長岡は私の故郷特別な気持ちで〝Jupiter〟を歌う

花火がきっかけとなり長岡とのご縁をいただきました。2004年に初めてフェニックスが打ち上がってから、来年で20年目になるんですよね…。本当に〝長岡と共に歩んできた〟という想いが強いです。

〝震災復興花火フェニックス〟という花火が、みなさんの募金で打ち上げられているということ、フェニックスを打ち上げることが、いかに大変なことかを知っているので、こうして続いているということが本当にすごい。これからもずっと続いて欲しいです。

東京で、テレビやラジオ局など沢山の方と仕事をしている中で「私、実は長岡出身なんです。いつもお世話になっています」とか「いつもありがとうございます！」と、声をかけてくださることが何度となくあります。そのたびに故郷ができたような気持ちになるんです。私は東京生まれで育ちも東京なので、〝故郷に帰る〟という感覚に憧れのようなものがありました。なので、そんな風に長岡の方たちに声をかけていただけることがとっても幸せです。

私にとって長岡はもはや故郷。人もとってもあたたかくて、よく面倒をみてくださいます。まるで本当の家族のように愛してくださるので、私も素になって自分を出すことが出来る大切な場所です。それは、コンサートにおいても同じで、長岡公演ではいつも特別な気持ちで臨んでいます。

そして、私にはこれまで約20年間で築き上げた〝長岡との絆〟があります。これから先10年、20年とずっと繋がっていたいと願っていますし、フェニックス花火や長岡のみなさんをいつまでも応援したいと思います。そして、今回のツアーで歌う〝Jupiter〟は、いつもよりもさらに特別な気持ちで歌えそうです。

もっと教えて 平原さんと長岡のつながり

長岡花火とともに戦後70年の式典に——

長岡花火は世界的にも有名なので、とても誇らしい気持ちになります。2015年に、パールハーバー・ヒッカム基地のフォードアイランドにて長岡花火の打ち上げが決定し、第二次世界大戦70年の式典で、戦争犠牲者への追悼の意を込めて打ち上げられた時は、私も参加させていただきました。平和への祈りを込めて、“Jupiter”を歌わせていただいたことは、一生忘れられないです。

長岡市立高等総合支援学校校歌「世界でたったひとつの絵」の作詞作曲

校歌を作るのは、私にとって初めての経験でした。学校に伺った際、廊下にみなさんが描いた絵が飾られていて、そのどれもが素晴らしく魅力的でした。それぞれの夢を抱きながら、自分にしか描けない“たったひとつの絵”を描いてほしい…そんな願いとエールを込めました。

初めての復興祈願花火フェニックス

初めてフェニックスを見たときは泣けて泣けて仕方なかったです。まわりにいたみなさんも泣いていました。みんなの想いがつまった花火をこれからも毎年観たいと、強く思います。

美味しい食べ物

いつも長岡の新米を取り寄せています。枝豆も毎年楽しみにしています！昨日も食べました(笑)。

Profile **平原 綾香**

2003年12月17日に『Jupiter』でデビュー。今年でデビュー20周年を迎える。2004年の日本レコード大賞新人賞や、2005年日本ゴールドディスク大賞特別賞をはじめ、様々な賞を受賞。吹き替え声優や、ミュージカルも多数出演し女優としても活躍している。2022年6月には新曲『キミへ』を含むNEWアルバム『想い出がラブレター』をリリース。日中国交正常化50周年の記念日には中国のバーチャル歌手「洛天依」(ルォ・テンイ)とコラボレーションし「MOSHIMO」と「憶」の2楽曲を日本語と中国語で歌唱している。2023年6月から8月まで帝国劇場にて上演された『ムーラン・ルージュ！ザ・ミュージカル』に、サティーン役で出演。デビュー以来、シングル39枚アルバム24枚を発表し、ほぼ毎年行われている全国ツアーは好評を博している。父はサックス奏者の平原まこと。祖父はジャズトランペッターでホットペッパーズの平原勉。

長岡市立劇場 50th Anniversary

平原綾香

20th Anniversary Concert Tour 2023 〜Walking with A-ya〜

12/3(日) 開場 16:15 開演 17:00

長岡市立劇場・大ホール

全席指定 7,500円 〈チケット一般発売日〉9/30(土)
※未就学児入場不可 〈リリックm.c.優先予約〉9/29(金)

劇場・音楽堂等の子供鑑賞体験支援事業 文化庁

小学生〜18歳以下のお子様300名を無料招待します

どうぞこの機会に多くの子ども達に本物の舞台にふれ、
舞台芸術の素晴らしさをご実感いただけますと幸いです。

受付開始:9/30(土)〜 (規定枚数に達し次第終了)
完売の場合を除き、ご同行のお客様(19歳以上／有料)のチケットも合わせてご予約できます。

詳細・お申込みは専用サイトをご覧ください

子供文化芸術活動支援事業 について
(劇場・音楽堂等の子供鑑賞体験支援事業)
この取組みは、劇場・音楽堂等で行われる実演芸術の鑑賞・体験等を子供たちに提供する取組を文化庁支援のもとで行うものです。

お問合せ:サンライズプロモーション北陸 ☎025-246-3939